

描かれた熱田の鳥居



熱田区社会福祉協議会マスコットキャラクター

アツツとタックがご案内します。

アツツ

タック

熱田ブランドマークの中にも使われている「鳥居」。

令和3年春に行われました名古屋市博物館「描かれた宮宿」展で紹介されていた内容からヒントを得て、鳥居について調べてみました。

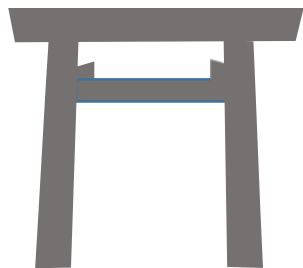


鳥居にはどんな意味があるの？

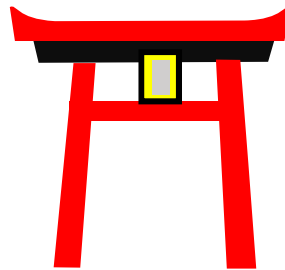
鳥居には神様がいらっしゃる場所と、人間が住む俗界をわける結界の意味があるんだ。



神明鳥居



明神鳥居



鳥居には様々な種類や形があり、使用される木材や構造也多岐にわたります。一説によると60以上もの鳥居の種類があるとされています。大別すると「神明（しんめい）鳥居」と「明神（みょうじん）鳥居」の2種類に分けられます。

神明系

歴史的にもっとも古いタイプの鳥居。2本の柱にまっすぐな木材を乗せ、さらに柱と柱にもう一本木を渡して強度を増したもの。(伊勢神宮、熱田神宮)

明神系

2本の柱の上に乗った横柱の両側が上に向かって反っているのが特徴。(稲荷神社、住吉神社)



伊勢神宮（神明系）



熱田神宮（神明系）



伏見稲荷大社（明神系）



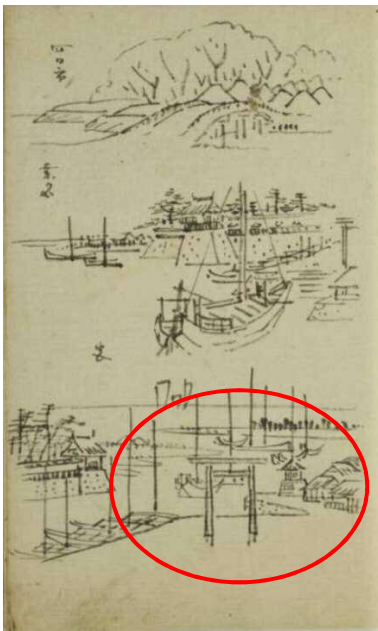
歌川広重が描いた鳥居

江戸時代の浮世絵師・歌川広重（1797年—1858年）は生涯に20種類以上の東海道シリーズを残したそうです。



「宮」を描いているので、鳥居は熱田神宮をイメージして描いたものと思われますが、明神系の鳥居です。この時期はまだ、広重は熱田に来ていなかった説が有力です。

歌川広重「東海道五拾三次之内 宮 熱田神事」(1835-1836 年頃)
熱田区歴史資料室所蔵



広重は「東海道五拾三次之内」を完結した翌年の 1837 年に関西や丸亀方面の旅行に出かけました。そして江戸への帰路、桑名から船に乗って宮へ渡っています。これは、その時に描いたスケッチ帖で現在は大英博物館に所蔵されています。

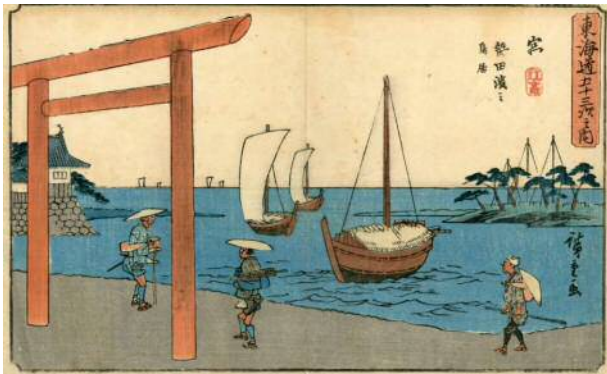


歌川広重『木曾路写生帖』(部分) 1837 年 大英博物館所蔵
© The Trustees of the British Museum



構図がかなり似通っており、スケッチを基にして描かれていると思われます。鳥居の真ん中には柱(額束、ぬかづか)がありますが、スケッチにある船の帆と間違えたのではないのでしょうか。

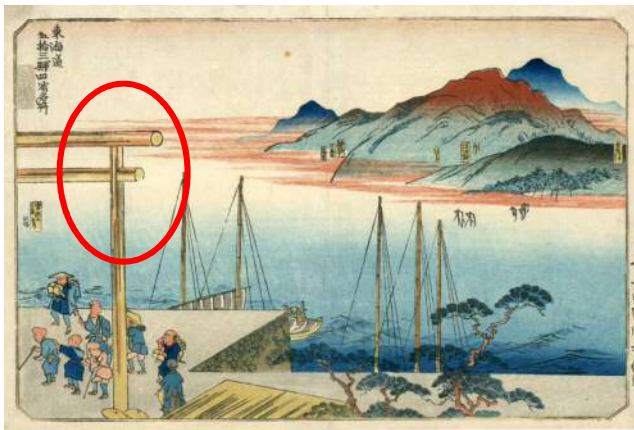
歌川広重「東海道五拾三次 宮」(江戸後期) 熱田区歴史資料室所蔵



神明系の鳥居ですが、横に渡された2本の木が2本とも丸い形です。

歌川広重「東海道五十三次之内 宮 熱田濱之鳥居」(江戸後期)
熱田区歴史資料室所蔵

歌川広重以外が描いた鳥居



横に渡された下の木が突き出ています。

歌川国芳 「東海道五拾三駅四宿名所」(江戸後期) 熱田区歴史資料室所蔵



横に渡された上の木が五角形です。



歌川芳虎「東海道 宮」(1863 年) 熱田区歴史資料室所蔵



どれが本当の形なのか分からないね。

絵に描かれているものが実景とは限らないってことだね。今回紹介した絵も、それぞれの作者が抱えている鳥居のイメージや既成の鳥居の絵をもとに描いたことが想定できる。絵には作者のフィルターがかかっていることを意識しておきたいね。

